論文の和文要旨

論文題目	張赫宙の日本語文学研究 ―植民地朝鮮／帝国日本のはざまで―
氏名	曺　　恩　美

本研究は、張赫宙の日本語文学を、植民地朝鮮／帝国日本を横断し、境界をこえて連関しあう文化状況のなかで、「帝国」へ移動した植民地出身作家という枠組によって考察した。戦後、日韓において、張赫宙の日本語文学は一貫して「親日」文学としてみなされ、批判の対象となっていた。本研究では、戦前の張赫宙の活動に焦点を当て、同時代の歴史・文化・思想状況を再検討しながら、彼の「日本語文学」をとらえなおそうと試みた。

序章では、韓国における「親日」文学に関する先行研究と、日本、韓国における張赫宙に関する先行研究を検討した。そこでは、作家論や作品論において、政治性が優先され、それによる図式的な解釈がなされていた現状を確認した。また、研究者と研究集団による個々の思惑が、研究に大きく投影され、それは繰り返されて、日本、韓国、在日朝鮮人の間で複雑に関わりあっていた。その結果、「抵抗」と「服従」という非常に強固な二元論的枠組を形成したまま、現在に至ったことを指摘した。また、張赫宙の「日本語文学」は国民国家を基盤とする一国史的な（国文学史）枠組ではとらえられず、矛盾と葛藤をはらんだ「植民地帝国日本」という歴史的な条件のもとでこそ深く分析できるものである、という認識を示した。

第１章では、張赫宙が、その作品・批評を発表したメディアに注目し、とりわけプロレタリア文学系の雑誌『文学案内』との関わりを検証することを通じて、植民地と帝国の文学のネットワークがどのように形成されたのかを考察した。さらに、植民地朝鮮文壇と帝国日本文壇のあいだで活動する意味とその可能性を探った。また、雑誌『文学案内』と植民地の文学者たちとの関わりを「朝・台・中国新鋭作家集」（1936年1月号）、「朝鮮現代作家特輯」（1937年2月号）から検討した。これらから、植民地文学者にとっての帝国日本の雑誌メディアとは、日本文学界と同時代的な関係を築き、いくつものベクトルをはらむ往還関係の中で思考と表現が生まれる場であったことがわかった。そこには、植民地文学者同士が互いの状況を確認し、植民地の問題を訴えていく機会が見られていた。植民地文学者たちの「日本語文学」が、「日本文学」への一方的な包摂ではなく、さまざまな相互交

流の可能性が存在する場であったことを明らかにした。さらに、このような雑誌メディアとの関わり、植民地と帝国の文学のネットワーク形成のなかで、張赫宙の日本語文学が生みだされた文脈を確認した。

第2章では、1938年、張赫宙と村山知義を中心にした植民地朝鮮／帝国日本の双方の演劇関係者の協同作業により「春香伝」が新協劇団によって上演されたことに注目して、植民地帝国日本における相互交通や文化の越境、そして協同の可能性についてさぐった。ここでは、「春香伝」上演前後における張赫宙と村山知義の活動、二人の出会いの経緯や、張赫宙と村山知義における「春香伝」の意味、朝鮮人のプロレタリア文化運動と村山知義の関わりについて考察した。そして、朝鮮人プロレタリア文化運動家・安英一、金浩永など上演に関わった朝鮮人について検討した。さらに、日本語版「春香伝」上演から派生し、張赫宙が朝鮮文壇を離れる契機となった座談会「朝鮮文化の将来」を取り上げ、植民地帝国日本における相互交通について考えた。また、日本語版「春香伝」上演を論ずる際、先行研究で用いられたことはほとんどなく、本研究においてはじめて取り上げる「新協劇団」発行の１次文献資料に基づいて、実証的な検証を通じて事実関係を確認し、張赫宙における「春香伝」上演の形成過程に改めて焦点をあてて検討した。

これらの考察を通じて、張赫宙による朝鮮の古典「春香伝」の翻訳は、植民地支配に拘束されながらも、日本に朝鮮文化を移植することによって、帝国日本から朝鮮を包摂しようとする「一方的な同化」を拒否し、朝鮮文化と日本文化との「相互交通」を図る試みであったことを明らかにした。また、「春香伝」上演には、従来の研究では注目されることがなかったが、プロレタリア文化運動の流れをくんだ各方面の朝鮮人が参加・協力し、朝鮮人と日本人の文化運動が互いに協同し合う形で生まれたものとして、新たな位置付けを行うことができた。

第3章では、植民地朝鮮から帝国日本に移住した張赫宙が「大陸開拓文藝懇話会」に参加し、満洲開拓にまつわる作品を数多く書いたことに注目した。ここでは、彼の「満洲文学」の特徴を代表的にあらわす万宝山事件に取材した長編小説『開墾』（1943年）、満洲をめぐる旅行記・随筆集『わが風土記』（1942年）を中心に分析を行った。当時の満洲における在満洲朝鮮人のおかれた境遇やその背景に留意しながら、張赫宙の「満洲体験」文学の諸相を把握し、張赫宙における「満洲」とはどのような意味をもつ空間であったのかを検討した。また、当時、張赫宙の在日本朝鮮人というポジションと「内地」日本に「在満朝鮮人」像を発信することの意味についても探った。それにより、張赫宙における満洲認識には、単純に肯定／否定、あるいは親日／反日という枠組ではとらえられない戦略的な「五族協和」像が存在し、植民地作家・張赫宙と帝国日本が「同床異夢」を抱いていたことを

明らかにした。

第4章では、張赫宙が1936年東京移住以降、在日朝鮮人社会を現場で体験していたことに注目し、戦前に張赫宙が描き出した在日朝鮮人像について考察を行った。ここでは、在日朝鮮人の居住地を取材したルポルタージュ「朝鮮人聚落を行く」（1937年）や、在日朝鮮人青年を初めて登場させた小説「憂愁人生」（1937年）、「路地」（1938年）を中心に分析を行った。そこでは、差別や帝国日本が掲げた同化の矛盾が暴露されていることを確認した。これにより、在日朝鮮人の文化や帰属をめぐる彼の認識を明らかにした。ここでは、張赫宙がこの時期からすでに、在日朝鮮人の文化や帰属をめぐる複雑な問題を予感し、内なる矛盾を抱えた存在として「在日朝鮮人」を認識していたことを明らかにした。また、在日朝鮮人青年が民族差別解消の手段として兵隊に志願するという主題の小説「岩本志願兵」（1943年）を取り上げ、当時「在日朝鮮人青年」が志願することの意味を検討し、志願兵制度や徴兵制が在日朝鮮人にどのように受け止められていたのかを探った。最後に、小説「岩本志願兵」の背景として描かれていた「高麗神社」の意味についても考えてみた。

以上の考察を通じて、以下では、「植民地帝国日本」における張赫宙の「日本語文学」がいかなる意味合いをもっていたのかを、提示したい。

張赫宙の「日本語文学」は、帝国側（日本文壇）からみた「植民地文学」という領域に自身の文学が吸収されるのを強く拒否することで一貫していた。日本文壇から名付けられた「植民地文学」なる呼称を頑なに拒否する張赫宙の「日本語文学」は、「自己目的的な機能」を帯びたものであると言える。このような、志向性に根拠をもつ張赫宙の「日本語文学」は、日本と朝鮮のプロレタリア文化運動の流れを組みながら、「親日／反日」という二項対立を超えるような実践的な活動を産みだしていた。それは、第1章で取り上げた帝国日本の雑誌メディアとの関わりからもわかるように、帝国で展開される日本文学への一方的な包摂ではなく、さまざまな相互交流の可能性が存在するものであった。そこでは、帝国の側からすれば、元来想定されていなかった、植民地と帝国、あるいは植民地と植民地の間での交流が生まれていた。さらにそれは、植民地帝国が抱えた矛盾がさまざまな形で現われ出ていた場でもあった。また、第2章で検討したとおり張赫宙と村山知義は、朝鮮文化の復興・紹介を目指し、朝鮮語・朝鮮人が主体になるプロレタリア文化運動が封殺されていたその時期に、朝鮮人と日本人の文化運動が互いに協同し合う形で「春香伝」上演を果たしていくが、他方でそれと対峙する形で朝鮮文学者たちの朝鮮文学翻訳不可能論が現れ、それぞれの企図がすれ違い、あるいはせめぎあう結果を生んでいた。また、第3章で取り上げた「在満洲」朝鮮農民の現状を知らせようとした長編小説『開墾』、そして『開墾』執筆に先立って満洲視察旅行後に出版した随筆集『わが風土記』には、彼がどのよう

に満洲を眺めていたのかが具体的に表現されていた。ここでは、「満洲」の農業において朝鮮移住農民が重要な役割を果たしていることを訴えかけていた。さらに、第4章では、張赫宙が初めて在日朝鮮人を描いた小説「憂愁人生」においては、植民地的状況が生み出した在日朝鮮人の帰属や錯綜したアイデンティティを主人公を通じて表現し、祖国である朝鮮にも、生まれ育った「日本」にも帰属することが出来ず、周辺人としての在日朝鮮人二世の実情やアイデンティティのあり方を形象化していた。

本論文では、張赫宙が植民地朝鮮、帝国日本、さらに「満洲」を移動しながら、おこなった創作をはじめとする活動を以上のように取り上げ、論考し、植民地と帝国を横断・越境し、連関しあう文化状況のなかで矛盾・葛藤をかかえながら生み出された張赫宙の「日本語文学」は、植民地／帝国をつなぐキーパーソン的な存在として重要な位置を占めていたことを明らかにした。